

1 今回の研修は有益でしたか。

- 被爆者の援護及び研究における国家との円滑な協力関係と体系的な管理・医療システムの充実に驚き、大変参考になった。
- 一週間の研修期間という制約下にもかかわらず、訪問先をテイラーメイド（Ex. 県病院の精神神経科をアポイント）いただき、心から感謝する。
- 日本の人々の親切さ、謙虚さ、小さなことにも最善を尽くす姿には、見習う点が多かった。
- 著名な先生方から直接講義をいただいて、大変光栄だった。

2. この研修で得た知識、または技術を実際にどのように利用するつもりか説明してください。

- 核戦争防止国際医師会議（IPPNW）のハワイ支部を立ち上げたい。
- （韓国）国家放射線非常時診療体系の先進化のための基礎情報資料として活用したい。

3. HICARE の事業をより改善するために、今回の研修に関するあなたのご意見をお聞かせください。カリキュラムや期間、その他について。

- 日本の被爆者と直接会って、医師対患者の関係だけでなく、その人の体験談や心の悩みなどの様々なお話を聞くチャンスが欲しい。
- 講義をしていただいた先生との人間的な会話というか、お付き合いをする時間が少なかったのが残念。
- 病院の施設見学等の時間を増やして欲しい。
- 被爆者に対してどの機関（病院）がどのようなサービスを提供しているか、私はまだ混乱している。こうしたものを体系的に記したワン・ページのディレクトリーのようなものがあればと思う。
- 各訪問先での講義の冒頭で、原爆被害に関する導入部分についての繰り返し（重複）があり、貴重な時間をもったいなく感じた。訪問先では即座に実践的な講義やディスカッションに入ってもよろしいと思う。
- 養護ホームでは、職員とともに入園者を介護する実務的な体験があればさらによかった。
- 急性被爆者に対する除染などの実践トレーニングがあればよかった。

4. 広島での滞在について

(1) 広島での生活にどのような印象を持たれたか教えてください。

- 活気が少し足りないような感じがする都市だった。
- 広島はまさに奇跡であり、人間のスピリットまでは決して破壊されないこと証明する都市だ。
- 都市全体は特に華やかさはないが、静かで落ち着いた雰囲気であり、人々から余裕が感じられた。

(2) 広島での滞在中、日常生活で不便を感じたことがあれば教えてください。

- 韓国語で表示された案内がもっとあって欲しい。

5. 研修を終えて感じたこと

- 日本に対する一部の否定的な考えがだいぶ変わった。このようなことについて韓国に帰って話をしたい。
- HICARE の各機関が、被爆後の復興、患者の徹底した管理、研究を通じて緊急被ばく事故発生時に即座に対応できるよう、すでに様々な最高のシステムを整えているながらも、さらに上を目指して努力されている姿が印象的だった。
- 講義をしていただいた先生方は、年齢や地位に関係なく熱い講義や案内をしてくださったことに大変感謝している。後輩の若い先生に任せないで、直接我々に対して講義・案内をしてくださったことには頭が上がらない。
- こちら側から被爆者に歩み寄って健康診断のサービスを提供する姿勢(原対協の移動健診など)に感銘を受けた。
- 私は今後、標準的な心理・精神分析テストなどの手段を用いて、ハワイの被爆者へのパイロット研究に取り組みたい。
- 看護婦長としての日常の忙しさに忙殺され、病院で働く理由が仕事のための仕事になっていたことを反省した。苦しむ人々のために、原点に立ち返り、より親切に、人のために仕事をしようとして再決意した。(自分の役割についても一度考えてみるよい機会だった。)
- 65年の年月が過ぎたにも関わらず、未だにその傷を背負って生きている人々に直接会い、感じ、あらためて放射線被ばくに対する警戒心が強くなった。
- 被爆2世の遺伝的な原因が未だ明らかになっていない状況で、半世紀以上の長年かけて絶え間なく疫学調査・研究を行っていることに驚いた。
- 百聞は一見に如かず。HICARE 研修はある意味で広報活動の役割を果たしており、このプログラムの実施を通して、世界平和実現に向けての国際協力推進に寄与されることを期待している。
- 実際の被爆患者の診療記録などに基づいた研究結果を保有することで、放射線の人体影響に関する膨大な量の資料につながり、世界に貢献されている。韓国も、これらの研究結果を資料として活用させてもらいたい。
- HICARE に関わる全員が、それぞれの分野でプロ精神と使命感を持って業務に従事している姿を見て、多くを学んだ。
- (広島大学病院との) コネクションを形成できた。これ以上のお土産はない。
- 我々の病院の立地(アメリカ西海岸)はテロ攻撃の標的を否定できない。患者に対し放射線の種類と線量を正確に測定することの必要性を痛感した。
- 私は幼少時より、船乗りだった父が被爆直後の広島を訪れて撮影した写真を見て育った。そのイメージを持ちながら、このたび活気に満ちたモダンな都市に復興した広島を訪れてみて、驚くとともに感慨深いものがあった。